

地域経済研究会シンポジウム

地域経済の階層性と関係性 —市場システムに着目して—

本特集は、2008年8月23日に京都大学で開催された「地域経済の階層性と関係性—市場システムに着目して—」と題するシンポジウムの記録である。このシンポジウムでは、大貝健二氏（京都大学大学院）が「産地」と「市場」とを結びつける取引制度に着目しながら、産地形成と地域経済の関係を捉える議論を展開し、続いて三輪仁氏（京都大学大学院）がマイクロ・マクロ・ループの視点から、経済主体と地域市場、マクロ市場との連関について検討した。また、渡邊英俊氏（京都大学大学院）は「商品連鎖」の視点から、国民国家の枠組みを超えた貿易構造に焦点をあて、経済空間の拡大による市場形成過程を明らかにするとともに、池島祥文氏（京都大学大学院）が国際機関による制度設計機能を取り上げ、制度の空間的拡張による市場の拡大過程を論じた。

今回のシンポジウムでは、上記4つの報告のほか、冒頭に、シンポジウム全体を貫く視角を整理した問題提起を行っている。問題提起、各報告を踏まえたうえで、地域経済学の措定する空間的範囲やそのアプローチの方法にわたるまで、報告者とフロアをまじえた活発な討論が行われた。

次頁には、シンポジウム実行委員会によるシンポジウム開催にあたっての趣意書を採録している。シンポジウムの目的および報告者の問題意識を汲み取ってもらえれば幸いである。なお、本特集に関連した論文が採録されているが、これらは報告後に加筆・補正したものである。

シンポジウム開催にあたって

「地域」概念が措定する領域は一意的でないため、分析対象に応じて地域経済の領域規定も流動的となる。そのため、地域経済を把握する分析視角も多様にならざるを得ないが、しかし、研究の多様性と体系化は相反するものと断定することもできないであろう。体系化自体を目的にすることの帰結として、研究内容が硬直化する事態は忌避されるべきだが、論理的な体系化を模索することも、研究の「多様性」を確保するうえで必要なのではないか。過度な相対主義に陥ることなく、論理的体系化の一助となりうる視点を模索することが本シンポジウムの目的である。

その一つの分析視角として、本シンポジウムでは「市場」システムに焦点をあてている。地域経済が自己完結的な存在でない以上、ひとつの「地域」経済は（垂直的・水平的に）他の経済と「市場」を介して連動していると捉えられる。既存研究では分析対象を領域区分と一致させる傾向が強いため、分析作業上、その領域が固定化されてしまうことになるが、現実には、地域の領域的制限性は開放的であり、固定化されているわけでもない。流動的なその領域間関係を媒介する存在として、各報告者は市場システムに着目している。ここでは、市場システムを需給バランスによる価格決定メカニズム作用の働く抽象的な機構として仮想しているのではない。取引をはじめとする交換原理が作用する領域を有する空間的実体として位置づけている。証券取引所のような競売機能を有する具体的組織だけでなく、取引が行われる場所、領域といった空間的領域を含んでいる。また、純粹な経済活動だけでなく、交換機能に影響を与える政治的作用、文化的作用、制度的作用も、市場システムの構成要素として捉えている。

その際に、レベル（次元の高低）とスケール（規模の大小）を組み合わせ、地域経済の階層性と関係性に着目しながら、経済活動の全体像を把握することを試みている。「地域」を local(sub-national)レベル, national レベル, inter-national レベル, supra-national レベルに区分するとともに、各レベルにおける地域経済と市場システムの関係性の相違を浮かび上がらせている。いわゆる「地域経済の階層性」を具体的に表象しながら、地域経済の全体的構造の解明に接近しようとしている。異なるレベル・スケールの経済分析を統合することで、レベル・スケール通貫的な視角を析出する契機を掴んでみたい。

（文責：シンポジウム実行委員会：池島祥文）